国際中等教育研究　第11号　p.3～15
東京学芸大学附属国際中等教育学校研究紀要

平成29（2017）年度上半期　国語科における授業実践記録および評価に関する取り組み

Efforts to record and assess classroom practices in the Japanese Language Division in the first half of 2017

国語科
浅井悦代　石川直美　宇佐見尚子　川崎真理奈　坂元若菜
杉本紀子　中野久美子　西村諭　廣瀬充　若宮知佐

1．はじめに

本校では、2010年に国際バカロレア（IB）中等教育プログラム（MYP：Middle Years Program）に認定されてから7年が経過した。また、昨年度からはDP（Diploma Program）が始まり、5・6学年の一部の生徒はそのプログラムを受けている。これらのプログラムは、概念理解の重視、探究的な学習など、いくつかの視点から特徴づけられるものである。そこで本稿では、本校国語科における評価基準をもとにして、次期学習指導要領の改訂を視野に入れた学習内容の取り組みを示したい。

2．国語科の6年間の評価規準

本校国語科では、目指す資質・能力の育成にあたって、各学年で下に示す評価規準を設定している（図1）。1学年から4学年はMYPの評価規準に準じているが、5学年と6学年はそれをもとに本校独自に設定したものであり、DPにおける評価もこの規準を使用している。

図1　本校国語科における評価規準

<table>
<tr><th></th><th>1年</th><th>2年</th><th>3年</th><th>4年</th><th>5年</th><th>6年</th></tr>
<tr><td rowspan="5">IB型（認知ベース）</td><td colspan="4"></td><td colspan="2">知識・理解</td></tr>
<tr><td colspan="4">分析（Analysing）</td><td colspan="2">分析</td></tr>
<tr><td colspan="4">構成（Organizing）</td><td colspan="2">構成</td></tr>
<tr><td colspan="4">創作（Producing Text）</td><td colspan="2"></td></tr>
<tr><td colspan="4">言語の使用（Using Language）</td><td colspan="2">言語の使用</td></tr>
<tr><td rowspan="5">文科省型（技能ベース）</td><td colspan="3">国語への関心・意欲・態度</td><td colspan="3">関心・意欲・態度</td></tr>
<tr><td colspan="3">話す・聞く能力</td><td colspan="3">話す・聞く能力</td></tr>
<tr><td colspan="3">書く能力</td><td colspan="3">書く能力</td></tr>
<tr><td colspan="3">読む能力</td><td colspan="3">読む能力</td></tr>
<tr><td colspan="3">言語についての知識・理解・技能</td><td colspan="3">知識・理解</td></tr>
</table>

また MYP では、生徒が学習を効果的に進めるために身に付けるべきスキルとして、ATL（Approaches to learning）スキルの枠組みを設定している。このATLスキルは次のように5つの枠組みと、項目として10のクラスターに分けられる。

コミュニケーション（①コミュニケーションスキル）
社会性（②協働スキル）

自己管理（③整理整頓する力・④情動スキル・⑤振り返りスキル）
リサーチ（⑥情報リテラシースキル・⑦メディアリテラシースキル）
思考（⑧批判的思考スキル・⑨創造的思考スキル・⑩転移スキル）

さて、次期学習指導要領の改訂における議論では、「教育課程全体や各教科等の学びを通じて『何ができるようになるのか』という観点から、育成すべき資質・能力を整理する必要がある」と言われている。そこで本校国語科においては、「本校で使用している評価基準」と「ATL スキル」の関係を整理し、概念や学習活動の要素をキーワードとして抽出したうえで、MYP 段階の１～４年と５・６年それぞれについて、具体的な学習内容・活動を以下のようにまとめた（図２）。

図２

キーワード	学年・科目	学習内容・活動
内容と構造の把握	１～３年「国語」 ４年「国語総合」	〈２年〉テクスト／情報がもつ論理構造や、その背景の状況を理解し、内容を捉える。 〈３年〉テクスト／情報がもつ論理構造や、背景となる社会的課題がもつ構造を理解し、的確に内容を捉える。
精査・解釈	１～３年「国語」 ４年「国語総合」	〈３年〉複数のテクスト／情報における共通性と対立点を整理することで、自分なりの意味や価値を見出す。 〈４年〉テクスト／情報のつながりや差異を整理したり、細部に注目したりしながら、それらを統合して意味や価値を見出す。
考えの形成・深化	１～３年「国語」 ４年「国語総合」	〈１年〉新しい情報を、既に持っている知識や経験、感情に統合し、構造化する。 〈４年〉情報／知識を経験や感情に照らし合わせたり、実生活の文脈に位置付けたりしながら、明確化・構造化する。
評価	１～３年「国語」 ４年「国語総合」	〈１年〉文脈を踏まえ、自らが表現したものや表現行為そのもの、他者の表現を評価することで、よりよい表現活動へとつなぐ。 〈３年〉自らが表現したものや表現行為そのもの・他者の表現を評価することで、よりよい表現活動へとつなぐ。
活用	１～３年「国語」 ４年「国語総合」	〈２年〉学習分野を統合し、新たなものの見方を構築し、実生活に活用する。 〈４年〉学習によって得た知識を整理・統合し、多角的な側面から新たなものの見方を構築し、実生活に活かす。

キーワード	学年・科目	学習内容・活動
分析	５・６年 現代文・古典	＜現代文＞説明的文章の読解において筆者の主張を理解し、根拠をもって説明する。 ＜古典＞古典の読解において、文章や表現の意味を文法的な要素や語意の幅を含めて確認し、理解する。
評価	５・６年 現代文・古典 ６年国語表現	＜現代文＞評論の背景にある知識や現代社会の諸課題について理解し、筆者の主張の是非や価値を説明する。 ＜古典＞通時的･共時的両面から作品の影響関係や間テクスト性を理解し、作品の時代的・社会的意義を論じる。 ＜国語表現＞他者の意見の論旨を的確に理解・評価し、論理的・合理的に議論を組み立てる。
応用	５・６年 現代文・古典	＜現代文＞論理や構成の読み取り方を汎用的に用いて作品やテクストを読解する。 ＜古典＞先行する他作品に関する知識を用いて、作品やテクストの意味を読み深めたり、作品の背景をより詳細に想像したりする。
再構築	５・６年 現代文・古典 ６年国語表現	＜現代文・古典＞分析・考察を経て、作品やテクストに精度の高い解釈を与える。 ＜国語表現＞資料やデータの分析を用いて主張を明確化し、論理を組み立てる。

さらに「次期学習指導要領における資質・能力の３つの柱」との関係を整理し比較すると、３つの柱の一つ「知識・技能」は、自分が用いる言葉に対するメタ認知に関わることであり、これは本校の評価規準における「言語の使用（Using language）」と重なるものである。

「思考力・判断力・表現力等」では、創造的・論理的思考を高めるために、「情報を多面的・多角的に精査し構造化する力」がこれまで以上に必要とされるが、これはリサーチスキルと同等であると言ってよい。また、「考えを形成し深める力」の育成のために「情報を編集・操作する力」、「新しい情報を、既に持っている知識や経験、感情に統合し構造化する力」、「新しい問いや仮説を立てるなど、既に持っている考えの構造を転換する力」が必要とされることは、ATLのリサーチスキルや思考スキルの求めるところでもある。ほかにも、「感情や想像を言葉にする力」の育成や「言葉を通じて伝え合う力」など、多角的な側面から育成することが求められているが、これらは本校の目指す資質・能力と方向性を共にしているところでもある。

そして、これらの評価規準を総合的に学習の中に落とし込み、具体的に対象化することを通して身についた言語能力は、言葉を通じて考え方を深め、言葉を通じて伝え合うことを通して、生涯にわたってその向上を目指すものであり、やはり「学びに向かう力、人間性等」と同じ方向を向いたものであると言えよう。

３．上半期の授業実践記録

参考資料として、今年度の上半期に１学年から６学年において展開された国語科の授業実践を表に示した（図 3）。１学年～4 学年までは MYP に基づくため、MYP において単元設計に必要とされている、Key concept（重要概念）、Global context、Statement of inquiry（探究テーマ）と使用教材を記載した。

図３　2017年度上半期　実践単元一覧表

学年		科目	単元	Key concept（重要概念）	Global context	Statement of inquiry（探究テーマ）	使用した教材とその著者（教科書教材には下線）（副教材・参考資料として使用したものも含む）
MYP対象学年	1（中1）	国語	言葉の力に気づく	ものの見方	空間的時間的位置づけ	言葉とは記号であり、全てのものを表すことができる	谷川俊太郎「はる」 加藤周一「言葉とは何か」 宇治拾遺物語「尼地蔵と出会うこと」
			説明文を読む	ものの見方	個人的表現と文化的表現	事実を語る表現にも書き手の意図が反映されている。	小関智弘「ものづくりに生きる」（説明）
			漢字の成り立ち	文化	空間的時間的位置づけ	文字の成り立ちの背後には先人の工夫がある。	「漢字の成り立ち」
			人間と動物の共存について	ものの見方	科学技術の革新	自分たちが住む世界は全てのものによって成り立っている。	若生健二「変わる動物園」（説明） 龍村仁　「ガイアの知性」（説明） 高村光太郎「ぼろぼろな駝鳥」（詩）
			自分を愛する心	アイデンティティー	アイデンティティーと関係性	自分を愛する心が、他人と出会わせ世界を創造する。	古橋道夫「ぬすびと面」 古野弘「奈々子に」
	2（中2）	国語	ことばのつながり	つながり	個人的表現と文化的表現	吟味された言葉は受容を変える。	大江健三郎「吟味された言葉」（随筆）
			学校の魅力を伝える	創造性	個人的表現と文化的表現	他者を意識して表現すると、創造性豊かなプレゼンテーションを行うことができる。	話す・聞く1「魅力を伝えようプレゼンテーション」（表現活動）
			絵から詩を創作する	美しさ	個人的表現と文化的表現	発見やアイデアを検討すると、新たな創造を生む。	書く1「想像する言葉　物語・詩を作る」（表現活動）
			表現の細部を読む	ものの見方	アイデンティティーと関係性	語り手の視点を読解することで「読み」が深まる。	安岡章太郎「サーカスの馬」（小説）
			文学を読む	変化	アイデンティティーと関係性	心情や価値観は構成によって変化をもたらす。	太宰治「走れメロス」（小説） シラー「人質」小栗孝則訳
			言葉の力について考える	ものの見方	個人的表現と文化的表現	言葉の力をビジュアルによってより表現することができる。	石川啄木「一握の砂」「悲しき玩具」
			手紙でしか言えないことがある	コミュニケーション	個人的表現と文化的表現	手紙でしか言えないことがある。	谷川俊太郎「手紙」（詩） 堀江敏幸「歌でも読む様にして」（随筆）
			誰が文化を創造するか	創造性	空間的時間的位置づけ	優れた読み手は、新たな文化の創造は、すでに「環境」となり意識されることのない「文化」の上に築かれているということを読み解くことができる。	「敦盛の最後」（平家物語より）（古典） 能「敦盛」
	3（中3）	国語	言葉の働きについて考える	コミュニケーション	個人的表現と文化的表現	言葉の働きを考えることで新しい視点が生まれる。	長田　弘「最初の質問」（詩） 岡本夏木「言葉の共有」（随想）
			伝わる意見文を書く	コミュニケーション	アイデンティティーと関係性	根拠を示すことで意見をよりよく伝えることができる。	鷲沢萌「ケナリも花、サクラも花」（随想） 書く1「批評する言葉 批評文を書く」（表現活動） 野矢茂樹『新版 論理トレーニング』（評論）
			文学を読む	ものの見方	個人的表現と文化的表現	問いを立てて読むと「読み」が深まる。	井上ひさし「握手」（小説）
			比喩表現の達人になる	創造性	個人的表現と文化的表現	比喩は非日常的感覚を効果的に伝える。	開高健「輝ける闇」（小説）
			評論を読む	つながり	空間的時間的位置づけ	歴史の語り方に、書き手の意図が反映している。	玉木正之「運動会」（評論） 「あのとき　それから　運動会始まる」（朝日新聞 2015/5/9）
			本紹介のスピーチをする	アイデンティティー	アイデンティティーと関係性	「書く」ことでテーマを焦点化することができる。	「話し言葉で伝えるために」（表現活動） 話す・聞く1「パブリック・スピーキング」（表現活動）
			言葉の力に気づく	つながり	空間的時間的位置づけ	言葉を通して空間・時間を隔てた他者と対話できる。	別役実「寂しいお魚」（小説） 高浜虚子「ほが」俳句十五句」（俳句） 山之口獏「存在」（詩）
	4（高1）	国語総合（現代文）	言葉と私	アイデンティティー	グローバル化と持続可能性	言葉は人の世界認識のあり方と大きく関わっている。	志賀直哉「国語問題」（評論） アルフォンス・ドーデ「最後の授業」（小説） 三浦しをん『舟を編む』（小説） 鈴木孝夫「ものとことば」（評論） 今井むつみ『ことばと思考』（評論） 鳥飼玖美子『「英語公用語」は何が問題か』（評論） 永井愛『ら抜きの殺意』（戯曲） 田中克彦「「一つのことば」とは何か」『ことばと国家』（評論） イ・ヨンスク『「国語」という思想』（評論） ハルオ・シラネ・鈴木登美『創造された古典』（評論） 川口良・角田史幸『日本語は一つか』（評論） 内田樹「ことばとは何か」（評論）
			純文学を読む	ものの見方	個人的表現と文化的表現	文学は様々な表現を駆使して、その主題を描いたものである。	芥川龍之介「羅生門」（小説） 『今昔物語集』「羅城門の上層に登りて死者を見たる盗人の語」 本の紹介スピーチ
			他者と生きる	文化	アイデンティティーと関係性	異文化や他者へのまなざしは、自己を定義・確立する欲望に支えられている。	高階秀爾「「間」の感覚」（評論） 山崎正和「水の東西」（評論） ルース・ベネディクト『菊と刀』（評論） 本橋哲也「「東洋人」として他者を描くこと」（評論） ステラ・ヤング「私たちは皆さんの感動の対象ではありません、どうぞよろしく」（映像） 岡真理「開かれた文化」（評論） ウマ・ナーラーヤン『文化を転位させる』（評論） 鵜飼遵「外見だけの先住民」 武田泰淳「ひかりごけ」（戯曲）
			プロフェッショナルとは何か	ものの見方 つながり アイデンティティー	個人的表現と文化的表現	個人の価値観は、社会的文脈によって形成され、また社会的文脈を生み出す。	「奥の細道」・宇治拾遺物語「絵仏師良秀」
			旅を定義する	つながり 時間・場所・空間	個人的表現と文化的表現	行動の意義や定義は、どのようなコンテクストの中で読むかによって変わる。	伊勢物語「東下り」（第7段～9段）
			理想の政治を考える	ものの見方 関係性	個人的表現と文化的表現	説得力のあるテクストは、私たちの振る舞いや意思決定に影響を及ぼすことを意図した言葉を用いる。	論語
			何をどのように表現するか	美しさ 形式 時間・場所・空間	個人的表現と文化的表現	何かを表現するためには、内容だけでなく、表現する素材や形式との関係が重要である。	唐詩（柳宗元「江雪」・杜牧「江南春」・杜甫「月夜」・李白「静夜思」）・論語

MYP対象外の学年	5（高2）	現代文B	「紙」の可能性について考える				原研哉「情報の彫刻」（評論） 池澤夏樹「本は、これから」（評論）
			文学を読む				中島敦「山月記」 国訳漢文大成　文学部第十二巻　「人虎伝」
			言葉の意味生成の過程について考える				内田樹「物語るという欲望」 内田樹「映画の構造分析」（評論） 「第三の意味　映像と演劇と音楽と」 ロラン・バルト（評論）
		古典B	構成に着目して説話を読み解く				『宇治拾遺物語』「袴垂、保昌にあふこと」「漁師、仏を射ること」
			主張の根拠となる事象を捉える				故事「病膏肓に入る」「尾を塗中に曳く」
			語りの世界を表現する				『伊勢物語』「行く蛍」「小野の雪」
			時代背景と社会に対する見方の関わりについて考える				『方丈記』「養和の飢饉」「仮の庵」
			重陽の節句に関する漢詩を比較して論じる				孟浩然「故人の荘に過る」杜甫「登高」
	6（高3）	現代文B	他者との対話				岡真理「虚ろなまなざし」（評論） 熊野純彦「同一性という暴力」（評論） 『ピュリッツァー賞受賞写真全記録』（写真集）
			近代を読む1				竹内啓「近代合理主義の光と影」（評論） 森鷗外「舞姫」（小説） 前田愛「ベルリン1888」（評論）
			「表象」出来事を伝えるということ				目取真俊「水滴」（小説） F・ゴヤ「戦争の惨禍」（絵画） R・キャパ「倒れる兵士」（写真） S・ソンタグ「他者の苦痛へのまなざし」（評論） H・アーレント「全体主義の起原」（評論） S・スピルバーグ「シンドラーのリスト」（映画） C・ランズマン「ショア」（映画）
			近代を読む2				岸田秀「擬人論の復権」（評論） 辺見庸「声の諸相」（随想） 大澤真幸「リスク社会とその希望」（評論） 石牟礼道子「後生の桜」（随想）
			言葉と身体				阪本俊生「ポスト・プライバシー」（評論） 小浜逸郎「人間の根拠としての『身体』」（評論） 西谷修「問われる『身体』の生命」（評論）
		古典B	政治的能力とはどのようなものか				『大鏡』「南の院の競射」 『史記』「四面楚歌」
			政治が人に与える影響とは				「補蛇者説」（文章）
			人生について考える				『和泉式部日記』「夢よりもはかなき世の中を」
			「公」と「私」について考える				『源氏物語』「光源氏の誕生」「飽かぬ別れ」
		古典A（古文）	身分や境遇と人物像の関係性				『源氏物語』「かかやく日の宮」『大鏡』「時平と道真」
			怪異の背景には何があるのか				『源氏物語』「廃院の怪」「車争ひ」
			登場人物と語りの視点				『大鏡』「宣耀殿の女御」「中宮安子の嫉妬」
			歌論における理想の歌とは				『俊頼髄脳』「誹諧歌・連歌」『後鳥羽院御口伝』「おほかたの歌の姿は」
		古典A（漢文）	正しい生き方とはどのようなものか				『史記』「伯夷列伝」
			思想と社会との関わりとは				荘子・韓非子
			処世について考える				『史記』「越王句踐世家」
		国語表現	社会的課題は自己認識にどのようにつながっているだろうか				調査・論述・ディスカッション
			議論可能(debatable)な問いとは何か				調査・ディベート・プレゼンテーション・小論文

4．授業研究会での実践報告(1)

杉本紀子

4．1　6年生　授業名　6年DP文学　「文学と社会」

4．2　対象生徒　　6年1組　8名（IBDP履修者）

4．3　教材『いのちの初夜』（北條民雄）角川文庫　1994年（平成6年）6月改訂35版発行

『あん』（ドリアン助川）ポプラ文庫　2015年（平成27年）4月第1刷

※その他の副教材・リソースは冊子ユニットプランナー参照。ユニットプランナーに記載していない資料としては次のようなものを生徒に配付・使用した。

・「癩予防ニ関する件」（明治40年法律第11号）条文

・「癩予防法」（昭和6年4月1日）条文

・「らい予防法」（昭和28年法律第214号）条文
・「らい予防法の廃止に関する法律」（平成8年法律第28号）（らい予防法の廃止）条文
・『癩王のテラス』（三島由紀夫）『決定版　三島由紀夫全集』25　新潮社　2002年（平成14年）12月

4．4　単元名　　文学と社会―社会的事象は文学にどのように影響するか・文学は社会的事象にどのように影響するか―

4．5　単元設定の理由と本単元のねらい

文学の役割とは何か。本校の「現代文B」で使用している教科書に採録されている「文学の仕事」（加藤周一）には次のようにある。

> 文学がなぜ必要かといえば、人生または社会の目的を定義するためです。文学は目的を決めるのに役立つというよりも、文学によって目的を決めるのです。そしてその目的を達成するための手段は技術が提供する。（中略）科学技術がいくら発達しても、その目的は社会にとっても個人にとっても決まってこないと思う。自ら考えて生きていこうとすれば、考えるときには科学技術は助けてくれない。文学が助けてくれると思う。役立つかどうかではなくて、そもそも人生に意味があるかどうかが文学的問題でしょう。

文学は人生や生き方の問題と関連させて語られることが多い。だが、ともすればそうした語り方は道徳的・倫理的・教育的役割を持つものとして文学を語ることに陥る危険性をはらんでいる。もちろん文学にはそうした側面もあるだろうが、「よりよい生き方」「理想的な生き方」「よりよい社会」「理想的な社会」のあり方のみを描いたり考えさせたりする作品ばかりではないことは明らかである。

いったい「文学」とは何か、人はなぜ「文学」を生み出し、「文学」を読むのか―DP文学の1年と7カ月を終えて、生徒がどのような理解にたどり着いているのかを確かめてみたい。

今回の単元では、これまでのDP文学での学習の振り返りと総括を行う。またその過程において特にATLの転移スキルを活用し、これまでの学習経験によって獲得した知識やスキルを「どのように」また「どの程度」活用・応用することで、文学作品をより深く探究することができるのかを確認することをねらいとしたい。

転移スキルを活用するには「転移」させるための元の知識・スキルがある程度獲得され積み上げられている必要がある。また多様な文脈での活用方法を生徒が発想することもできなければならない。そうした点を踏まえて言えば、転移スキルがどこまで活用できているかということとそれをメタに認知していくことは、MYPからDPへと学習経験を積み上げてきた今の最終段階にこそ確認されるべきことではないかと考えられる。

内容的なねらいとしては同じ要素やテーマが語られる文脈の違いを作品ごとに読み取り、その文脈がどのような背景を持っているのか、その文脈を形成している要素は何であるのかを考え、作者の創り出す文脈と読者が読み取る文脈に「社会」そして「社会の記憶としての言葉」がどのように働きかけるのかまでを考えることとしたい。

DP 文学のパート区分との関係

冊子内ユニットプランナーに記載したことでもあるが、今回は最終試験終了後の DP 文学の総括的な単元として設定するため、特にパート区分をしていない。ただし、パート区分をしなかったことの理由はそれだけではない。

そもそも DP 文学のパート区分とそこで扱えるテキスト（作品）には、ガイドからは見えてこない制限がある。DP 文学 HL のコースでは４つのパート区分をあわせて 13 作品を主たる作品として扱うこととされている。パート区分ごとに扱える作品にはジャンルや年代の条件がある。詳細は DP の教師用資料を参照されたい。ここで問題として取り上げたいのは、PLA（指定作家リスト）と PLT（指定翻訳作品リスト）の存在である。DP 文学 HL ではこれら二つのリストから次のように作品を選ぶことが条件なっている。

パート１（翻訳文学）　PLT 掲載の作品から 3 作品

パート２（精読学習）　PLA 掲載の作家の作品から 3 作品（うち１つは詩であること）

パート３（ジャンル別学習）　PLA 掲載の作家の作品から 4 作品

パート４（自由選択）　PLA や PLT に掲載されていない作品でも可。3 作品

13 作品の内 10 作品は IB が指定するリストから「必ず」選ばなければならないこととなっている。さらには「見えない限定」も存在する。それは「書籍が実際に入手できるか否か」に関わる限定である。二つのリストにその書籍名が掲載されていても日本国内ではすでに絶版になっていたり、作品によっては高額な文学全集にしか収められていなかったりするものもありうる。こうした作品を生徒全員に全てのページをコピーして配布することは困難であろう。図書館で長期に亘って借りることも貸出期限がある限り現実的ではない。電子書籍化されているものもあるが高額なデバイスを用意することが必要になったりもする。こうした条件によって、実は授業の主要なテキストとして使えない作品が多くある。またリスト自体も日本文学に関しては更新の頻度が低く、特に随筆・評論のジャンルに関しては直近の時期の著者のものがほとんど入っていないため、新たな時代の観点や視点が見える作品は選ぶことができない状態である。

誤解を恐れずに言えば、DP 文学で選択が可能なテキストの範囲は実は「狭い」。またリストには「古い」という側面もある。日本の学習指導で行われている教材選択の自由度（幅）や教科書採録の教材の「新しさ」と比べるとそれは明らかである。もちろん DP 文学においては、主たるテキストではなく、学習を深めるための補助的な教材としてリスト外の作品や新しい作品を使うことは可能であるので、授業設計次第ではいくらでも他の作品を扱うことはできる。

しかし、最終試験を終えた今言えることとしては、結局最終試験の出題に関わる作品の多くはリストから選ぶしかないということである。そして、リスト内でもいくつかの作品は物理的理由から淘汰され、選べる範囲はさらに狭くなる。それは結局授業設計の硬直化ややりにくさにもつながっている。

こうした作品選択の非柔軟性や授業設計上の問題を解消するためには、DP 文学の作品選択の仕方そのものが変わることも必要なのではないかと思われる。今回この単元をあえて DP 文学のパート区分にあてはめなかったことの背景にはこうした問題意識がある。

４．６　単元の指導目標

1.　社会的な事象や課題（今回の場合は「ハンセン病」とそれに対する差別）が文学作品においてどのような文脈で扱われているかを読み解き、作品の主題との関わりについて批評する。
2.　文学作品の主題やモチーフが、現実社会の事象や我々の価値観にどのような影響を与える可能性があるかについて探究する。
<DP ガイドブックに則して>
1. 文学の機能とは何かについて、特に現実認識や社会的文脈との関連において考察する。(TOK と関連)
2.　テクストが書かれ、受け取られた文脈の重要性を理解する。
3.　テクストを多角的に分析し、それらが読者にどのような影響を与えているかを評価する。

４．７　単元の評価規準

ＤＰ文学のパート区分に関わらない単元であるので、本校独自の５年・６年生の評価規準を用いる。なお、本校国語科ではこの評価規準を設定するにあたってはＭＹＰとの継続性やＤＰへの対応を考慮している。
規準Ａ　知識・理解：(論評)（レジュメ）（ディスカッションでの意見）
①作品の社会的背景について、調査をもとに整理して理解できたか。
②作品を社会的文脈の中に位置づけて解釈できたか。
規準Ｂ　分析：(論評)（レジュメ）
①言葉・表現・文脈・文体などに着目して作品を分析的・批判的に読むことができたか。
規準Ｃ　構成：(論評)
①作品と社会的事象の関係を的確にとらえ、論理的に述べることができたか。

４．８　全体計画（これまでの流れ）

冊子のユニットプランナー作成時には本時を全体の第６時目と設定していたが、交通機関の乱れ等によって生徒の大多数が大幅に学校に遅れる事態となった日が１日あったため、その日の授業１時間が行えなかった。よって第１時に行う予定であった内容を変更した。よって本時は全体 10 時間中の第５時となる。

時間	学習内容
第１時 （11月16日）	・今回の単元で扱うテーマが「差別」であることを知る。 ・「差別」にはどのようなものがあるかを想像し、ブレーンストーミングを行う。 ・これまでのＤＰ文学で扱った作品や自分がこれまで読んだことのある作品（英語でもよい）の中で、「差別」を扱った作品はあるか、それはどのように「差別」が表象されていたかを思い出し、述べる。
第２・３時 （11月17日）	・「ハンセン病」についての既存の知識の確認 →中学３年生の社会科で授業を受けたことはあるが、「らい」という呼び名から「ハンセン病」を思い出せた生徒は半数以下だった。また、差別を受

	けた病気であったことや「伝染する」と言われていたことは思い出せたが、そのほかの知識はほとんどなかった。 ・「ハンセン病」について、現在のメディアではどのように扱われているかを知る。 　テレビ番組の視聴「探検バクモン：ハンセン病を知っていますか？」 ・映画『砂の器』の紹介と最終場面の視聴 ・古典文学（主として説話）の中で「癩」という文字を用いて記される病が表れる章段３つを時代ごとに読む。 →「癩」という文字が用いられていても必ずしも「ハンセン病」と同一の病を指すわけではないということを指摘した上で、科学的・医学的知識の乏しい時代においては皮膚に症状が表れる病がある程度同一視されていたことを指導者側で指摘した上で、分析を行うよう指示をした。 ・明治 40 年発布の「癩予防ニ関する件」～平成「らい予防法の廃止に関する法律」を読む。 →法律にも文脈がある、ということを生徒はすでに理解していた。その上で「ハンセン病」やその患者に対してどのような態度や感情がどのような文脈をもって表されているかに注意して読むよう指示をした。 ・古典文学、法律、現代のメディアに「ハンセン病」がどのような文脈をもってどのように表されているか、読み取ったことについて意見を出し合う。
第４時 （11月20日）	・『いのちの初夜』と『あん』についての分析① それぞれの時代や作家の経歴の違いに注意しながら、「ハンセン病」がどのような文脈をもって描かれているか、読者にはどのように受け止められるかについて二つのグループに分かれて意見を共有する。 ・それぞれのグループ内で出てきた意見を持ち帰り、自分なりに作品を分析して次回までに発表資料にまとめてくることとする。
第５時 （11月24日） ＊本時	・『いのちの初夜』と『あん』についての分析② 各自が作成してきた発表資料を読み比べながら、１人５分程度で分析した事柄を発表する。 ・各自の分析を聞きながら相互に質問をしあう。 ※互いに問いかけ合う中で、根源的な問いに深められるとよいと指示する。 ・各グループで出た分析で説得力のあったもの、またグループで中心になった論点について発表する。
第６時 （11月27日）	・『いのちの初夜』と『あん』についての分析③ 前回の他のグループの意見を踏まえた上で、考えが深まっていなかった点について議論する。 ※時代や社会的背景を踏まえて考えることに留意する。
第７時・８時 （11月30日）	・映画『あん』と小説『あん』の比較 表現する媒体（メディア）の違いは、どのような文脈の違いを持つかについて考える。

	・文学における「差別」の表象が、読者を通して社会に与える影響について考える。 ・読者を含む社会の記憶が、どのような言葉となり、「差別」を表象するかについて考える。
第９時・第10時 （12月１日）	・作品解釈と議論を踏まえて、文学作品における差別がどのように表象されているか、またその表象の仕方（され方）が表す意味について論述する。 ・論述したものを互いに読み合い、コメントで評価する。

４．９　本時の展開

〈１〉本時の目標

・二作品に描かれる「ハンセン病」と「差別」に関しての理解を、他者の分析を聞いて深める。
・他者の分析を聞いて、相互の読解を深めるような問いかけを行う。
・議論を通して、自分の分析を客観的に評価する。

〈２〉本時の評価規準

規準Ａ　知識・理解：（論評）（レジュメ）（ディスカッションでの意見）
①作品の社会的背景について、調査をもとに整理して理解できたか。
②作品を社会的文脈の中に位置づけて解釈できたか。
規準Ｂ　分析：（論評）（レジュメ）
①言葉・表現・文脈・文体などに着目して作品を分析的・批判的に読むことができたか。

時間	学習内容	教師の指導・支援	評価規準 （観点・評価方法）
５分 （５分）	前時までの学習を振り返る。 これまで出てきた以下のような問いや考えについて、自分の意見や考えが変化したり深まったりしてきたかを振り返る。 ・差別と偏見の関係性はどのようなものであるか。 ・差別は「感情」か「行動」か「現象」か。 ・「ハンセン病」を扱う文学作品における「差別」の扱いはどのようであるか。	・前回までの学習を振り返る問いかけを行う。 ◇これまでの授業で話してきたことの中で、今も意識している問いは何か。今も疑問に感じていることは何か。 ◇今回作品分析を行って、新たな見方ができたか。 本日の資料配布・本日の流れの説明	
２５分 （30分）	発表資料に基づいた、グルー	・二つのグループの発表・議論を観察する。時に教員も議論に加わり、生徒が指摘でき	規準Ａ　知識・理解 規準Ｂ　分析 方法：レジュメ・議論

	プ討議 ・自分たちが作成した発表資料に基づいて、グループ内で自分の分析したことと解釈を一人ずつ発表する。 　発表に対する質問はその都度行う。 　議論の軸になった問いや考え方を忘れずにメモする。 各グループで議論になった内容を発表する。 ①分析や解釈において共通した点や最もグループ内で説得力があった意見 ②疑問が残った点・議論になった点	てない点があれば、教員側から指摘する。 ・できるかぎり分析・解釈の根拠を明確に指摘するよう指示する。 ・議論になった点については何が議論の焦点であったのか、どこで解釈が分かれたのかについて明確にするよう指示する。	の内容 規準A　知識・理解 規準B　分析 方法：議論の焦点の述べ方・内容
15分 （50分）			

5．授業研究会での実践報告(2)

論語を通じて政治を考える

西村諭

5．1　対　象　4年3組（男子１３名　女子１４名）

5．2　単元名　「何を」「どのように」伝えるか

5．3　単元の目標

・本文に示されている思想について、本文や資料に根拠を求めながら、多様な視点で分析し、解釈することができる。【規準A分析（Analysing）】

・資料を比較しながら、自分の意見を論理的に構成することができる。【規準B構成（Organizing）】

・受け手に伝えたい内容を、効果的なスタイルと表現を選択して創作することができる。【規準C創作（Producing text）】

・本文の叙述に従って、語句の意味、文法的意味、文脈を的確に理解し、読解に役立てることができる。【規準D言語の使用（Using language）】

5．4　単元設定の理由

本クラスの生徒は、海外からの帰国生が6名、入学選抜試験において外国語作文を選択した生徒が１０名おり、日本語に不安を感じている生徒が少なくない。古典に興味はあるものの、古典の学習に不安を感じている生徒が多く、とりわけ漢文については、返り点のルールなどは理解しているが、漢字に対する苦手意識から、漢文の学習に対して大きな負担を感じているようである。しかし、古文においても

漢文においても、現代語訳や参考となる説明文などの補助資料を提示するなどして、内容の把握や理解を助けた上で探究的な問いを投げかけると、多様な視点から本質を捉えようとする姿勢が往々にして見られる。

さて、次期学習指導要領では特に「情報を編集・操作する力」、「新しい情報を、既に持っている知識や経験、感情に統合し構造化する力」、「新しい問いや仮説を立てるなど、既に持っている考えの構造を転換する力」を働かせること、一つ一つの学習活動において資質・能力の育成に応じた言語活動（言葉による記録、要約、説明、論述、話合い等）を充実させることなどが大切であるとする。それにともない、高等学校国語の科目構成が変更され、実社会・実生活に生きて働く国語の能力を育成するための科目「現代の国語」（共通必履修科目）では、例えば「目的に応じて多様な資料を収集・解釈し、根拠に基づいて論述する活動」や「根拠を持って議論し互いの立場や意見を認めながら集団としての結論をまとめる活動」などが重視されている。また、同じく共通必履修科目の「言語文化」では、「古典だけでなく、古典に関わる近現代の文章を通じて、言語文化を、言葉の働きや役割に着目しながら社会や自分との関わりの中で生かすことのできる能力の育成」をねらいとしている。

そこで本単元では、MYP における ATL スキルのうち、特に「転移スキル」「メディアリテラシースキル」「協働スキル」に焦点を当て、さまざまな古典作品について「何が」「どのように」表現されているかを多角的に捉えさせるとともに、自らが発信者となったときに、「何を」「どのように」表現すれば効果的に相手に伝わるのか、ということを意識させる学習を計画した。また、古典作品のテキストだけでなく、多様な資料を示すことによって、目的に応じて情報を収集し、対話を通して考えをまとめる力の育成を図り、あわせて、社会との関わりを考えるきっかけとしたいと考え本単元を設定した。

５．５　単元の指導計画（全７時間）

第１次（１時間）　「何が」「どのように」表現されているか（杜甫「月夜」詩）

・表現されたものについて、「何が」「どのように」表現されているかを意識しながら解釈する。

・テクストを自分なりに解釈したうえで、別のスタイル（文体）でリライトする。

第２次（３時間）　政治と社会について考える

・生徒各自の考える理想の社会と、その実現の可能性について考える。

・孔子の言葉について、「正直」とは何かを考える。

・孔子の言葉「無友不如己者（己に如かざる者を友とすること無かれ）」を数学的に考察する。

・「朝三暮四」（『列子』）を読み、上に立つ者とそれに従う者の関係について考える。

・「悪人」とはどのような人かを、資料を参考にして考える。

第３次（３時間）　孔子が政党を立ち上げると仮定して、マニフェストを作成する

・１０月の衆議院選挙前に示された各政党のマニフェストを比較する。

・論語の文をもとに政策を掲げ、政党名を決め、政党ポスターを作成する。

５．６　本時の指導計画（第７時間目）

（１）目標

・さまざまなものの見方を身に付けるために探求における文脈を変更することができる。

・目的に応じて多様な資料を収集・解釈し、根拠に基づいて論述することができる。

・メディアの表現や発表形式がもたらす影響を理解する。

（2）展開

学習目標	学習活動	指導上の留意点
・目的に応じて多様な資料を収集・解釈し、探求における文脈を変更することができる。	・資料をもとに、マニフェストを制作する。 ・政党のアピールポイントを考える。	・資料をもとに根拠に基づいて表現させる。 ・伝わる表現を意識させる
・表現や発表形式がもたらす影響を理解することができる。	・所信表明演説として政策を説明する。 ・演説を聞き、実現可能かどうか考える。	・３分間で発表させる。
・政治や社会に目を向けることができる。	・理想の政治、理想の社会の実現性について考える。	・孔子の思想の特徴を考えさせる。

（3）評価

・目的に応じて適切な情報を収集し、探究における文脈を変更することができたか。
・他者を想定して、効果的に伝わる表現ができたか。
・理想の政治や社会について、考えを深めることができたか。

Efforts to record and assess classroom practices in the Japanese Language Division in the first half of 2017

Abstract

Seven years have passed since our school became an IB school for the Middle Years Program (MYP) in 2010. In addition, the Dual Language Diploma Program (DLDP) started in the last academic year, and some of the fifth and sixth graders are taking the program. These programs are characterized by some perspectives such as a focus on conceptual understanding and inquiry-based learning. Therefore, this report presents our approach to the contents of the teaching in view of the next Revision of the Courses of Study, based on the assessment criteria in the Japanese Language Division.